報告③

（特集）各地の高校魅力化プロジェクトを紹介　奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（上）

町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

（2）プログラムの意図と開発過程、内容

青山学院大学　樋田　大二郎

キーワード　高校魅力化、地域学校協働、町立移管、教員間の引き継ぎ、思いを引き継ぐ、高校まで町で過ごす意義、コーディネーター、吐きそうな気持ち、地域とのズレ

報告②では、松原聡史教諭、井上壮紀教頭、清水信彦校長の三人に町立移管時に参考にしたモデルについてうかがった。そして、取り組みを通して個々の教師が成長したこと、さらに教師集団が成長したことも紹介していただいた。

続いて、本稿では報告③として、町立に移管した後の奥尻高校が取り組んだ様々なプログラムの意図、開発の過程、具体的な内容を紹介していただいた。

奥尻高校の町おこしワークショップ、Ｗｉｆｉニーネー、まなびづけ、パブリシティなどの取り組みの継承について語って貰った。松原教諭は取り組みを継承していくことは重要であり、また、簡単ではないと考えている。奥尻高校では若い教員が多くて、入れ替わりが多いので、「五年後にはもう全部変わってるぐらいの感じ」で教員が変わるという。「地元のとのつながり、地元についての知識を継承する必要がある。また、ただ要綱だけを引き継いで、紙だけ引き継いでいってもなかなか難しいので、そのスピリットをどう受け継いでいくかということを心がけている」という。そのためには、「くっ付いてもらって、グループの中に入ってもらって」というようなことをしている。

奥尻高校はコーディネーターを置いていない。コーディネーターを置くことについては、「学校コーディネーターももちろんありだが、学校でみんなでやるっていうのも全然ありなのかな」と考えられているとのことであった。置かないことで教員が地域とのつながりを深め、そして教師としての成長があるという。教員が、一番最初に町の人に

挨拶しに行った時とかは、「正直吐きそうなぐらい緊張する」ということである。また、自分の提案が否定されて落ち込むこともあるという。「これが経験できると教員としてすごく価値あると思う」との語りがあった。

地域との協働については、「（町の人は、発表会の時に）自分の生徒みたいになってます、……一緒にやってきたんだから恥ずかしい格好しないでみたいな感じになってます。」という。松原教諭は、地域住民は、生徒たちと一緒に作っていくんだという感じで捉えてくれていると見ている。

1　町おこしワークショップ

――町おこしワークショップを開始されたのは？

井上教頭：一六年とかです。

――二〇一六年、平成二八年。

井上教頭：町立化した年から始めたんですけど、最初は昼休み。一〇分お話聞いて、次の一〇分ワークショップしてだったんですけど、次の年は七時間目に。

松原教諭：水曜日七時間目。

井上教頭：水曜日だけ七時間目で、一時間の中で話を聞いてワークショップ。

松原教諭：まとめて発表。

――一時間の中で話を聞いて、

井上教頭：前半、課題を話していただいて、後半でその課題について解決策を子どもたちが考えるっていうふうに。それを前期にやって、後期はもう一回それを、もう一回考えて整理しようっていうので、一年間の間で同じ課題について二回。ひと通りやったあとに、グループ分けをして、僕たちのグループはこの課題についてもうちょっと掘り下げますっていうのを後半にやってますね。で、三年目は、

松原教諭：年間通して。

井上教頭：年間通してグループ分けして、自分たちの専門の課題について一年かけて。一年って言っても、去年は一五回ぐらいだったかな。

松原教諭：そうですね。後半の方に九月、一〇月あたりからスタートして。

井上教頭：で、解決策を提案します。

――そして今年のやりかたは？

松原教諭：今年は、「去年作った企画を実際にやろう」が半分で、「また新たに課題に対する企画を作ろう」が半分ですね。半分ずつですね。半分は実行部隊で、半分は新企画っていう形ですね。その一つが、そのお祭りのゲームになったのかな。足つぼ。

清水校長：縄跳び足つぼリレーです。

――すごい過酷な（笑）。

清水校長：健康がキーワード。高校生が優勝したと聞きました。

松原教諭:そうなんですか。自分たちで考えて、自分たちで持ってった。

清水校長：優勝してしまった感じですかね。

――去年とか今年で言うと、町おこしワークショップっていうのは、どのぐらいの頻度で？

松原教諭：年間一二回ですね。時間的には一二回から一三回で。一カ月に一、二回ある程度で。

――一回あたりの時間が？

松原教諭：一時間で。全部で一二時間しか取ってないので。

――もう昼休みという体制ではなくなって？

松原教諭:そうですね。授業の中で総合的な学習（探究）の時間の時に。

――総合の時間を使って。やっぱり小さな学校だから全学年一斉にできるんでしょうかね？

松原教諭：そうですね。分けても一班六人とかですか。今年はもっと少ないのか。

井上教頭：今年は四人ですかね。何グループ。一七とかあるのかな。

――一七グループぐらい。これは一七人ぐらい町の方が来てくださるということですか？

松原教諭：海産物をやるところに四人グループが何グループもあって、そこに町の方が来てくれる形なので、今年は町のほうの分野では七分野ぐらい来てくれてるはずですね。場所によっては、海産物とかだと青年部会の人とかをみんな連れてきてくれるので、五人とか六人で来てくれるところもあるし、一人で来ていただいてるところもあるので、トータルは何人か把握してないんですが、七分野ぐらいの専門家が来てくださって、いろいろと話を。

――すごいですね。昼間の働いてる時間っていうことですよね？

松原教諭：そうです。

清水校長：町の方がすごく協力的で、ほんとに申し訳ありませんという感じなんですが、学校に対して本当に協力的な方が多いんです。

――各分野から月に一回か二回誰かが来てくれる。

松原教諭：専門の方が来てくださるのは、年間で三回か四回だと思いますね。毎回ではなくて。最初と中間報告と、あと時間ある時と、最終報告に来てもらう形ですね。

――それ以外の時には、

松原教諭：聞きたいことあったら電話してみたり、来てくれたりっていう。やっぱり町の方はすごくそういうことに協力してくださるので、電話して「こんな質問あるんですけど」って言ったら「今行くわ」って言ってくれる人がいたり、結構そこのフットワークはやっぱり島ならではだなと思います。すごく軽いです。「仕事帰りにちょっと寄るね」みたいなのもよくあるので。

――すごく興味深いんですけども、イメージとしては四人一組ぐらいで、研究活動というか、学習活動をする。それで年度の最初と最後。あるいは真ん中ぐらいは専門分野ということで、七分野の人が来てくれる。それ以外の時には、その四人一組で生徒たちが勉強会ふうなことを行うっていう形ですか？

松原教諭：そうですね。自由に放課後残って、ワイワイってやって。例えば一昨日に「なべつる祭」っていう奥尻の最後の祭りがあったんですけど、その一つのイベントをこれで作ったんですよね。グループの子たちが。で、それを実際やるためにやりたいんですけどって観光協会の方にお願いして、お祭りの二日ぐらい前に観光協会の方が学校に来てくださって、打ち合わせしてたりしたので、でもそれは別に全校生徒でやってるとかではなくて、放課後の時間使って話ししてみたいな感じで。

――そういう四人一組ぐらいのグループで。

松原教諭：そうですね。

――じゃあ、ある意味生徒が町の人たちを呼び出すわけですね。電話で。

松原教諭：そうですね。そんな感じになってるんですけど。そういう意味ではちょっと面白いかもしれない。

――町の学校という意識は根付いてる感じですね。すばらしいですね。それでは今後の計画あるいは、今後どういう課題を解決していきたいというか、今後のことはどう思っていらっしゃいますでしょうか？

2　Ｗｉｆｉニーネー

――具体的にどんなことをなさってるか、現状を教えてください。どんな取り組みをなさってますでしょうか？　進路指導からでいいです。

松原教諭：進路だと町おこしワークショップをやって、進路は結構いろんなこと。町おこしワークショップや「まなびづけ」っていう勉強会やったり、Ｗｉｆｉニーネーっていうのは、うちは島根県さんのように大学生が直接来るっていうことはすごく難しいので、でもやっぱり僕たちの進路が考えてたのは、大学には行ってほしいなっていうことで、やっぱり大学生と関わる機会をっていう意味でスカイプで大学生と毎週一回面談をするやつをやってて、それがＷｉｆｉニーネーっていう感じですかね。手帳もやったり、思い付くのやってましたね。

――ニーネーと言うのはどういうネーミングなんでしょう。

松原教諭：兄ちゃん、姉ちゃんです。Ｗｉｆｉでつながるお兄さんお姉さんです。

清水校長：私も一番最初に教頭先生に聞きました。ニーネーって何？と。

松原教諭：やっぱりみんな気になる。

――そうですね（笑）。

実は先ほど校長先生から概要を伺って、こういう方法があったのかと感動しました。学校内だけで行い、とくにアカウントを交換するわけでもないのでＳＮＳの安全安心問題はオーケーでしょうし、大学生集めてもう片方で高校生全員を集めて両者をつなごうとするとこれはもう授業時間が合わないので、ほぼ無理です。個人と個人でつながり、しかも個人的にアカウントを交換しなくても済むというのが、すごいと思いました。

松原教諭：結構おすすめです。しかも二年目、三年目だと生徒に全部任せるので。一年目は結構わからないので、僕の方で「何時ね」っていうのを常に把握というか一緒に決めて、メールしてって中間に僕がいて、大学生がいて、生徒がいるっていうこういう動きをずっとしてたんですけど、二年目からはもう終わる時に、「来週の何時でお願いします」ってやって、それをただホワイトボードに書いて、緊急でできなくなった時だけ僕がメールするみたいな感じでやると結構生徒は自分でかなり把握しながらやってて、面白いなと思いました。

もう完全に自走してるので、最初につなげるのと、たまに面談するのとっていうぐらいで、それはあまり負担にならずに、生徒は楽しいみたいですね。

3　まなびづけ

――そのほかはどんな取り組みがありますでしょうか。

松原教諭：あとは「まなびづけ」っていうのは、勉強する環境を作ろうっていうことで、泊まらなければ一日一二時間の勉強時間と、泊まるのであれば最大二泊三日で、ひたすら朝から晩まで勉強するっていうのもやってますね。

――これは自習ですか？

松原教諭：そうですね。自習です。場所はいろいろと学校だけじゃなくて、町の海洋研修センターとか、町立化したので、町の施設を借りるのがすごく簡単なんですよね。教育委員会に電話したら「いいよ」みたいな感じで言ってくれるので。なので、そういうところ借りたり、議会の二階がちょっとフリースペースで使わせてもらえるのでそこでやったり、いろんなところで。青苗地区っていうところの支所を借りたり、とにかく勉強する時間をぐっと一回、引き上げるっていう活動ですね。

4　パブリシティ――Ｕターン、Ｓターン、関係人口になってもらうために

――ＵターンあるいはＳターン。さらには関係人口という考え方もあるかもしれませんけども、そういった将来的な定住者、あるいは関係人口者になるために高校時代にどんなことを生徒に学んでほしい、伝えておきたいというふうにお考えでしょうか。

松原教諭：町おこしワークショップともう一個パブリシティっていう

のもやってるんですが、それが一番その考えにぴったりなのかなと思うんです。やっぱり自分が今生きているところの課題を考えてもらうっていう。で、その考えた課題を伝えるっていうことが一番かなと。それは多分どこの町に行ってもやれることなので、それをとにかく高校のうちにやらせようっていうふうにすごく思ってますね。そのやらせ方を一人ではなくて、仲間と一緒にやらせようっていう。そして、奥尻高校はさらにそこにプラスアルファしてるのが、同じ学年だけじゃなくて、縦割りでやらせるっていうのは、もう基本にしてますね。社会人になったら同年代とやることはほぼないので。他学年とどれだけ距離感を作りながらやってくかっていうのは。

なので、うちのイベントは縦割りはすごく多い気がします。

――このパブリシティっていうのは具体的にどんなことを？

松原教諭：パブリシティは町の例えばメインは人口減少に対するアプローチが多いんですけど、町に対して、政策提言っていうことで町長に直接お願いする、提案するっていう活動ですね。町長さんに。人口減少止めるために僕たちこんなことを考えたんですけどとかっていう。今年はちょっと人口ではないんですけど。

――この縦割りで行うことの効果というのはどういうふうに実感されてますか？

松原教諭：まず、組織力的にうちの全校生徒は六二人いるんですけど、それで一つっていう動き方ができるようになるので、小さい学校だか

らっていうのが少しでも多くはなるのかなっていうのが、まず一つですよね。これ縦割りにしないと、各学年で最大の組織が三〇人っていう組織が三つあるだけになっちゃうんですけど、全校生徒でギュッてできるので、何かイベントやる時に動きはいいのかなっていうことと、あとは何しててもやっぱり先輩後輩がすごくつながりが多い。

他の学校の生徒たちは奥尻高校の生徒が羨ましいみたいですね。島外に行った生徒とかもたまに帰ってくるので、そういう子が話すと先輩と関わることって部活ぐらいしかないんだけどっていうのはよくあるみたいで、うちはそこは日常的にあるので、羨ましがられるっていうことです。

あとは、先輩がいるっていうことは、常に昨年度のものが、経験として降りてくるので、クオリティーは上がるなとは思ってます、私的には。

またゼロからスタートではなくて、昨年のお土産を持ってのスタートなので、毎年クオリティーが自然と上がるっていう。

教員がしゃしゃることなく、クオリティーが上がるっていう感じです。

――例えば二年生が一年生の教室に行くとかそういったことがありますか？

松原教諭：ありますね。

――その逆も含めて。

松原教諭：はい。全学年そういう形です。

――そうですか。そうすると普段からかなりつながっている。

松原教諭：そうですね。

――縦割りをすることによって、つながりが深くなるし、深くなることによって、また縦割りがしやすくなってくことがある。

松原教諭：まず、入学してすぐに先ほど言ったピアサポートっていうので、先輩と後輩をマッチングさせて、一時間学校の好きなとこでしゃべってきてって言って、このへんを全校生徒が入ってきたばっかりの一年生と先輩が二人で歩きながら話ししたり、座って「こんな高校なんだよ」っていうのをまずスタートでやってっていうのがすごく大きいと思います。

で、そのマッチングでつながった二人が町おこしワークショップで同じグループになったりっていうのがあるので、話しやすくて、話し聞かせてもらうとか。あとは、「まなびづけ」は計画を立てる時とかがあるんですけど、勉強の一二時間計画を立てる時は、その先輩がチェックします。一年生がとんちんかんなこと書いてて、これはちょっと全然間に合わないよ。これじゃとかっていうのを先輩にチェックしてもらって、「まなびづけ」の勉強会に行くとかっていうのもあるので、比較的教員がなるべく出なくて済むようになるかなと。部活でやってることを学校でやる感じですかね。

5　教員間の引き継ぎ

――それでは、ご苦労されている点について。

井上教頭：そうですね。引継ぎがやっぱり難しいなって思ってます。今は。

――教員間の引き継ぎ？

井上教頭：若い教員が多くて、入れ替わりが割と早いので、五年後にはもう全部変わってるぐらいの感じで教員が変わるので、新しく来た先生方に今までやってきたことを引き継いでいかなければいけないんですけど、そこがちょっと難しさを感じてるところかなと思います。

――教頭先生的には、そういう時にはどのような工夫というか配慮をされるんですか？

井上教頭：今年それ課題だよねっていうところで、去年から言ってたことなんです。いろんなことやってるんですけど、一つ一つがどういう背景で始まったのかとか、どういう精神でやってるのかっていうようなことを伝えていかないと、ただ要綱だけを引き継いで、紙だけ引き継いでってもなかなか難しいので、そのスピリットをどう受け継いでいくかっていうところが課題だねっていうことで、当初はそれをスライドとかにまとめたり、動画にまとめたりして引き継いでいくのがいいんじゃないかっていうことで話はしてたんですけど、なかなかそ

こまで手が回ってなくて、ちょっとできてない状況です。

――地元の方とのつながりとか、地元についての知識とかそういったものは先生方はどうやって、どこから学んでいくんでしょうか。

松原教諭：町おこしワークショップの一番最初の時に、町とどうやってつながるかっていう時に、まず島の人に学校に来てもらおうということで、たくさんの人に来てもらって、昼休み一〇分ぐらい話をしてもらって一〇人ぐらい来ていただいてやったんです。それを教員も全員でやったので、先生方も一緒に話を聞くっていう中で、町の課題であるとか、どんな人がどんなふうに関わってるのかっていうようなことが少しずつわかってきてですね。

二年目はワークショップはメンター、アドバイザーみたいな感じで。

井上教頭：そうですね。くっついてもらって、グループの中に入ってもらってですね。

清水校長：島の課題は多くて、人口減少と消滅可能性都市第四位というのは、やはり改善・解決すべき課題がたくさんあるということなので、そこはまず島として、島の一員として学校で課題解決策を探っていきたいと考えています。

あと学校の今後の計画としては、やはり先ほど教頭先生からあったんですけど、この取り組みの意義を引き継いで持続させていくことが課題ですね。

データだけではなくて、思いを引き継ぐというところはかなり大事になってくるのかなと思います。

6　中卒で島を出ると島のことが分からないままになる

松原教諭：あと生徒をもうちょっと増やせたらまた面白い。外国人がもうちょっと増えたら僕は面白いなと個人的に思っております。あと来年も花火を上げられたら。

――花火ってどこ行っても話題になりますね。結構インパクトがあるんですかね？

松原教諭：そうですかね。ちょっと今年は花火上げれたので。来年も。

清水校長：来年は海洋研修センターの裏の海であげたら良いかもしれないね。

松原教諭：そうですね。お金をどっから捻出するかを考えなければいけない。

井上教頭：奥尻の地元の中学生が、函館とか札幌とかに出て行ってしまう子がいるんですけど、それはそれでいいんですけれど、奥尻高校に来て、地元のことを学んでから、いろんな課題を持った上で進学して、

島のために何かできないかっていう視点で勉強して、どこかで還元してくれるような、あるいは戻ってきて起業するとかっていうような子が出てきてくれるといいのかなと。それを町も期待してるのではないかなと思うんですけども。中卒で出ちゃうとやっぱり島のことはそんなに知らない。自分のイメージだけで、こんな島はもう嫌だみたいな感じで出て行く子もいるでしょうし。でもいろいろ見てみるといろんな魅力もあってというのをわかった上で、島から出て行くっていうステップになれればいいのかなと思います。

――中学校から奥尻高校への進学者数を見ますと、率で七割ぐらいですか。七割から八割ぐらい。それ以外の島の中学卒業生は、本土の高校に行ってる可能性があるわけですか？

清水校長：そうですね。函館、札幌に進学する生徒が多いかなと。

――毎年数名いらっしゃいますよね。確かに高校をここで過ごさなかったら、故郷のイメージちょっと先ほどの話じゃないですけど、ネガティブなイメージを持ってしまうかもしれない。

松原教諭：前、奥尻高校に入学して来てた子は、ほんとは函館行きたいんだけど行けないからっていう子が多かったと思う。今来てる子たちはそうではない子が。奥尻高校でいろいろ学びたいって思って来てる子が増えてきてるのかなっていうふうに。

――うれしいですね。それ。生徒さんの意識。また午後インタビュー

させていただけたらと思うんですけども、意識の中では高校の存続ということは特に意識にはのぼらない。町立化することによって。

松原教諭：そうですね。そこも特にないかなと。

――そうすると生徒さんとしては、高校存続よりも島を活性化させたいという意識で取り組んでいるという。わかりました。それでは最後になりますけど、その他ということで、何か先生方の視点でこの学校の取り組みについて思っていらっしゃること、考えていらっしゃることをお話し下さい。

7　コーディネーター

松原教諭：そうですね。広島県とか、島根県とかのコーディネーターさんがいる学校とは違ってうちはいないので、その役割を教員がやってるんですけど、それはすごく僕はポジティブに思ってます。それを大変だってきっと知らない方は思うと思うんですけど、僕は結構その町おこしワークショップの一番最初の町の人に挨拶しに行った時とかは、正直吐きそうなぐらい緊張してたんですけど、それがなければ僕たちは六〇歳定年まで自分の好きな教科を教えて終われるんですよね。

それが吐きそうになりながら、資料持ってその人のところ行って、「すいません。休みの日」、それこそさっき言った「お昼の時間に来てもらえませんか」って頭を下げに行かなければいけないんですけど、結局でもそのときにお付き合いさせていただいた方たちが今でもいろんなところで助けてくださるので、そういう意味では、これが経験できる

と僕は教員としてすごく価値ある学校だなと思いますね。結局、いろんな人がほんとにそこで、異動した方も、たまたまそこに出張に行った時には、「松原くん、来るのだったらちょっと顔出しなよ」とか言ってくださるんです。

松原教諭：それがほんとに教員にとってもすごくいいことだなと。もちろんコーディネーターさんがいた方が、やっぱり人脈は計り知れないので、呼べる方は多かったりするのかなとは思うんですけど、ただ地元のつながりっていう面では、僕たちはここに暮らして、ここで今生きてるので、地元の課題もやっぱりひしひしと感じるので、そこは負けないところかなと。そういう意味では、この形も結構ありだなと思ってます。今、日本で大きな流れになってる学校コーディネーターさんっていうのももちろんありですけど、学校でみんなでやるっていうのも全然ありなのかなと。

――コーディネーターを導入したとしても先生方は地域としっかりと吐きそうになりながらでも関わったほうがいいのでしょうね。

松原教諭：教育委員会とかもやっぱり顔出す機会はすごく増えてくるので、それは町立のおかげなのかなと。

――その吐きそうな気持ちよくわかりますよ。私も吐きそうな気持ちになりながら、町のいろんな人に会ってきたりして。

松原教諭：緊張しちゃいますね。やっぱり（笑）。

――しますよね（笑）。

松原教諭：最初、ｉＰａｄで説明しようと思って、持っていったんですけど、前日緊張しすぎていっぱい練習したら、当日電池なくなって、持っていっただけで、「ｉＰａｄあるぞって自慢しにきたのか」って言われるし、「いやいや、そんなことないんですけど」とか言いながら……。っていうとんちんかんなこといっぱいしてました。やっぱり教員やってると、学校にずっといれば冷静に断られることってあんまりないんですよね。対大人に。

「いや、それは無理だよ」って言われることってあるじゃないですか。お願いしに行くと。でも、教員だけやってると、そういうことってあんまりなくて、それに対する耐性がすごくないんだなってこの学校ですごく感じました。冷静に「それは無理だ。そんなことしてられないよ」って言われることももちろんあるので、「そうだよな」と思いながら。だからそういう意味ではすごく面白いですね。それ本来はそういう力こそ子どもたちに必要な力ですよね。子どもたちはほとんど教員にはならないので。そういう意味では進路の時。そういうこともあったよとかっていう話ができるっていう意味では、よりキャリア教育の方にはプラスになるような経験ができてるのかなと。

――あと、地域との協働をしていて、難しいなと思う点がいくつかあるんですけど、そのうちの一つは、地域の方は学校がすべて上手にお膳立てして、それから生徒が来てるもんだというふうに考える場合があると思うんです。そこでちょっと学校と地元の人の間で溝ができちゃ

うことが無きにしもあらずなんですけど、こちらではその問題はどうなってますでしょうか？

松原教諭：説明がそもそも違ったりするんですかね？

清水校長：そうかもしれないですね。

松原教諭：この町おこしワークショップはほんとにどんな感じでやってるんだろう。お膳立てっていうのは、ちゃんと、

井上教頭：事前にちゃんと形を整えてから行くのでお願いしますみたいな。

――地元の人は手伝うんだと。自分たちは手伝うんだから、高校は簡単に手伝える状態にしとかなきゃいけないのに、こんなこともまだ生徒ができないのかとか。

松原教諭：どうなんでしょう。自分の生徒みたいになってます、町の方は一緒にやってきたんだから恥ずかしい格好しないでみたいな感じになってます。それは、教員はほんとに町おこしワークショップは、教員は廊下にいるというのが、僕のすごく理想的な形だと思ってて、教員はなるべく当日は、町の方が来た時は、話に入らないでくださいという話をしてるんですけど、そういう意味では、町の方々も自分の生徒みたいな感じになってます。もちろんできない、準備不足の子たちもいるんですけど、「それじゃ駄目だ」とかという感じでやってくれてますね。なので発表会の時とかは、町の方同士がうちのグループの方がいい発表させてやるみたいな感じになってて、結構観てて面白いですね。それで、終わったあととかは、「うちが一番良かったぞ」みたいなのは、どこのグループでも言ってるので、そういう感じですかね。スタートは決して高いレベルではやっぱりない。

清水校長：そこは理解してくれてると思います。町の方々は、生徒たちと一緒に作っていくんだという感じで捉えてくれていると思うので、多分、最初のこの取り組みについての説明がうまくいってるんだと思います。今、学校に来てくださってる方々は、今年で三年目となります。

松原教諭：はい。びっくりしてますね。今、どんどん良くなってるねって。最初の時の生徒と全然変わってきたねって。